

街中のライブハウスにおける客の体験に関する一考察  
小さなコミュニティに集い交わる人々の語りから

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
岡田 彩香

京都や大阪の街中には多くのライブハウスが存在し、ライブハウスを中心に広がる文化がある。現在ライブハウスの数は増え続け、その形態は多様化している。また、その場に繰り返し足を運ぶ人々が存在する。今まで、心理学的な見地からライブハウスについて調査された研究は見当たらないが、その空間を頻繁に訪れる人々が存在するということから、ライブハウスという空間が独自の存在意義をもち、人々に何らかの影響を与えているのではないかと考えられる。本研究では、ライブハウスに通う客6名を対象にインタビュー調査を行うことによって、ライブハウスという空間がもつ存在意義について検討することを目的とした。

その結果、まずライブハウスでの体験を分析することにより、ライブハウスという空間の中に存在する4つの特徴が明らかとなった。(1)「一度きり」というライブ演奏の特徴、(2)「いいライブ、いい音楽を追求する」というライブに対する客のスタンス、(3)「役割の上に成り立つ“温かい”人間関係」というライブハウス内での対人関係、さらには、(4)「ライブ空間を楽しむための暗黙のルール」の存在であった。そしてその4つの特徴が互いに影響を与えあうことによって、客はエネルギーと愛情を注ぎながら、ライブ演奏を通してミュージシャンと向き合うことになる。

次に、ライブ文化と客の関わりについて検討した。その結果、客は堅苦しさを覚える職場とライブハウスという遊び場を行き来していることが分かった。そこにはひとつの循環が生まれている。彼らはまず敷居の高いライブハウスに行きつけの場に変える。そして日常的にライブハウスを訪れることによって、自らの生活に張り合いを出す。ライブハウスでの体験から、再び堅苦しい日常生活を送るためのエネルギーを持ち帰るのである。彼らにとって、ライブハウスに通うことは明日を生きるパワーを得られるものであり、そこに通うことが「楽しく生きる」ことにつながるということが明らかとなった。

以上の結果から、客はいい音楽、いいライブを追求するという目的に加え、その場でうまれる人々との親密な人間関係に魅力を感じてライブハウスを訪れていることがわかった。そしてその場には、個人的な体験のみではなく、人と人との間に生まれるエネルギーで親密な関わりが存在する。このようなライブ体験は、客にとって日常的な生きがいとなり、人生を「楽しく生きる」ことにつながる。その場は彼らにとって自己のバランスを調整する場として機能し、新たなエネルギーを「再生」していくことができる場所なのである。そしてこのような場が街中という身近な空間に存在することが、彼らの人生を支えているのだと考えられるだろう。

2010年度 修了